クイズの神様！

ゴウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
クイズの神様！

【Ｎコード】
Ｎ２０７１Ｈ

【作者名】
ゴウ

【あらすじ】
少年の名は田中健也。ある日、どこかに連れ去られたような感じで、どこかにいた。記憶もあることだけ無くなっている。そして、自分には恐ろしい過去が封印されているのだった……。

01　突然の出来事（前書き）

新感覚のような小説です。

Q1　突然の出来事

……ここはどこだ？
俺はあの後、どうしたっていうんだ？
……頭も痛む。何か薬品でも嗅がされたのか。
そんなことは思考回路がおぼつかなくとも分かる。しかし、誰にやられたんだ？
……そんなことを考えている場合じゃない。

「ここはどこなんだ……？」

少年は一人、暗い空間で呟いた。

「とにかく、ここがどこかを知らないとな。」

そう思って、俺は暗がりを手探りで進んだ。
前も真っ暗だ。何も見えない。

しばらく歩くと、光が見え始めた。

「光か……、光の速さはおよそ秒速三十万キロ」
こんなことを言いつつ、俺はその光の差す方へ進んでいった。

そして、出た先は……。

なんと学校と思われる建物だった。
どこの学校かは分からない、ただ、校舎内であることは俺には分かった。
教室に、一人。教師も誰もいない。
と思ったとき、ドアが開いた。
そこから入ってきたのは、一、二、三……、

「多いなオイ（汗）」

思わず言ってしまった。
それはそうだ。いきなり教師が三十人ぐらい入ってきたのだから。
しかし、この状況はどうも説明しがたい。
一体何なんだろうか？
そのとき、一人が声を上げた。

「はい、では席に座ってくださいね。」
「ん？あ、はい。」

と普通に座ろうとしたのだが、

椅子が無い。
どういうことだろうか？
また別の教師が声を上げた。

「問題です。構造的に、椅子には必ず何がある？」

……は？
何を言っているんだ？この人は。
まあ、いい。答えてやろうじゃないか。目の前に問題があったら答えられずにはいられないぜ！

「座面がある。」
「正解！座ってよし。」

と言われ、座った。

「では、これより入試試験を始める。」
「は？」

急展開についていけない。俺はまた声を上げた。

「おい、何でここにいるのか説明してくれよ？」

……。
誰も聞いていなかった。
何事だ、と思ったが、テスト用紙に目を向け、やり始めた……。

「やりますね、東大の人でも受からないようなテストを、百点取ってしまうなんて。」
「当然だ。俺に分からない事はほとんど無いぜ。」
「では、あなたは誰ですか？」
「……何だって？」

絶対に分かる問題だ。
分からなきゃ、頭はどうかしている。

「俺の名は……。」

あれ……？
思い出せねえ……。
自分の名前どころか、生年月日も好きなことも嫌いなことも、全て分からなくなっていた。

「どうです？最高でしょう？」
「てめえ、何をした？」
「さあ？でも、これだけは覚えておいてくださいね。ここにいるのは、私達とあなただけですから。」

そう言い、去ろうとしたのだが、

「……待てよ。俺はここで何をすればいいんだ？」
「ひたすら問題を解くのです。」

「へえ、面白いな。やってやろうじゃねえか！」
自信満々の言葉で言った。
すると、
「では、この問題、全て解くまでご飯は抜きですから。」
「何を……、うわ（汗）」
声を上げたのも無理はない。
なぜなら、タワーのような用紙を渡されたからだ。
これには、さすがに俺もたじろいだ。が、

「正解すればするほど、あなたは頭もよくなり、記憶も戻る。一石二鳥のテストです。……がんばってくださいね、田中健也さん。」
「！！」
自分の名は、田中健也……。
その瞬間、頭痛が俺を襲った。

『おい、もうねえのか？』
『は、はい……。』

というような映像だったが、何のことか分からず、テストに夢中になっていった。

恐ろしい、自分の本性が解かれるまではまだ先の話かもしれない。

Q2　自分の正体？

とにかく、問題を解かなければ。
ええと、第一問。
大日本帝国憲法は何年に制定された？
……答えは１８８９年だ。まだ簡単なほうだな。

第二問。位置エネルギーと運動エネルギーの和は何という？
……何だったっけな？忘れちまったな……。
ああ、あれだ。答えは力学的エネルギー。

「……にしてもよ、この問題、一体何をしたいんだ？」

俺はそう言った。
さらに、あいつらが俺をこんな学校に連れてきたのも分からないし……。
しかも、様子を察するに廃校だ。
一体どうなっているんだ？
それに、教師達も教師達だ。何で俺のことを知っているんだ？
俺はあんな奴らと会ったことが無い。
さらに、記憶が無いのもおかしい。

「ああ、もう！こんなこと考えても今は仕方ねえ！問題を解くんだ！」

こうして俺は、問題を解き進めていった。

そして、何時間か経った時、

「お、終わった……。」

死に掛けの人みたいな声で言った。

そう、あの問題量をとうとうこなしてみせたのだ。

そのとき、

ガララ。

戸が開き、教師が入ってきた。

男の教師だ。変なところをあげれば、リーゼントをしているところだ……。

「うっ！？」

また記憶が、蘇ってきた。

どうやら、ある学校の教師との会話のようだ。

『おい、リーゼントはやめなさい！』

『うるっせえんだよ！黙ってろ！』

そして、その教師を殴り……殺してしまった。

『アハハハハハ！』

そして、俺は狂ったように笑っていた……。

「うあああああ！！！」

突然の自分の昔の行動に、悲鳴を上げてしまった。

「どうだ？少しは思い出してきたか？」

少し嘲るような口調で俺に言った。

「てめえ……、何がしたいんだ？」

おれは率直に聞いた。

しかし、

「いずれ……、ぜ～んぶ思い出す。ヒャハハハハ！」

そう言ってリーゼント教師は去っていった。

もし、記憶が全部戻ったら、俺はどうなってしまうのだろう？
静かな教室で一人、そう考えているのだった。

Q3　謎のテレビ番組（前書き）

今回はやたら短く、急展開です。すみません（汗）

Q3　謎のテレビ番組

……このごろおかしい。
田中はそう思っていた。あんなに無意味な問題を解き続けさせて何の意味があるんだ？
そして、俺の記憶を戻すためになにかを示唆している気もする。
さらに、ここに監禁（？）されてから、もう一週間は経つ。
まあ、食事もしっかり出るし、いいんだがな。

そして、ある日の事。
眠っていたときに突然、目隠しをされた。
「！！」
咄嗟に反応したが、もうすでに遅かった。
そして、校舎を出て、何かの車に乗せられ、どこかへ行くのだった
……。

そして、ある場所に着き、連れられ、入った部屋があった。

「しばらくここで待ってろ。」

と目隠しを外し、今度はロープで縛り上げ、放置させた状態で奴らは出て行った。

にしても、ここは……、

「楽屋!?」

そう、ここは紛れも無い、テレビ局内だったのだ。

一体どこのテレビ局だ?

俺はそこいら中を隅から隅まで探した。

そして、見つけた。

「……スター、テレビジョン?」

そう、現在最も人気のあるテレビチャンネル、『スターテレビジョン』だったのだ。

一体、何をさせるつもりだ?

そして、数十分後。
突然ドアが開いた。

「……時間だ。」

そう言って、俺はスタジオへと連れて行かれた……。
しかし、本当に何をするつもりだ？

そして、スタジオ裏。
ここで待ってろ、と言われ、待っていることにした。
そして、その番組は始まった。

『さあ、今週はどんな回答者が出てくるのか？楽しみですね！』

メインキャスターの声だ。しかし、どこかで聞いたことあるような……。

『それでは、この番組、『裁高のクイズバトル！』の開演です！イッツ、ショウタイム！』

そして、『裁高のクイズバトル！』なる番組が始まった。

Q3　謎のテレビ番組（後書き）

え～、名前はわざと、『最高』ではなく、『裁高』にしました。
これには、あとで深く関係しています。なので、これは誤字ではない事を認識してください。

Q4　旧友との再会（前書き）

今回も短いです。
でも、次回は長くするつもりです。

Q4　旧友との再会

そして、オープニングが流れ、ＭＣが一言二言言った後、

『そして、記念すべき第一回目のゲストは、この方！』

一回目、どおりで聞いたことも無いはずだ。

そして、俺はスタジオへと入る。

『無職、田中健也さんです！』

そして、俺はスタジオへと入るなり、ＭＣの顔を見た。

すると、

「……うあっ！？」

また、記憶が……。

『なあ、今日何して遊ぶ？』

これは、まだ、幼い頃の俺だ。そして、話しかけている相手が、現

在、同じスタジオ内にいるＭＣ、もとい、鈴木……、卓也だ。

『う～ん、鬼ごっこ！』

『おいおい、ありきたりだな。』

『あの、大丈夫、ですか？』

ＭＣの声で、俺は現実へと戻された。

「あ……、はい、何とか。」

『そうですか。それでは、私、ＭＣ鈴木がこの番組のルールを説明させていただきます。』

やはり、合っていた。

しかし、それを気にせずに説明を始めた。

ルールは、

１　問題は全部で十問。

２　答えに詰まったときには、『ヘルピング　ツール（ｈｅｌｐｉｎｇ　ｔｏｏｌ）』が使える。

３　問題を正解すると、賞金が手に入り、獲得金額はどんどん上がっていく。

４　そして、最後の問題に答えることが出来れば、『一億円』が手に入る。

のルールだった。
一億円……、かなりの大金だな。これはゲットしたいな。

『それでは、あなたにお尋ねします。あなたは全問正解する自信がありますか？』

そう聞かれた。もちろん……。

「あります！！」

大きな声で言った。
そして、

『それでは、田中健也さんが、このクイズ達に挑みます。イッツ、ショウタイム！』

そして……、『地獄』の番組が幕を上げた。

Q5　番組、始動！！（前書き）

遅れてすみませんでした。
でも、読んでくれれば嬉しいです。

Q5　番組、始動！！

そして、クイズ勝負がスタートした。

『それでは、第一問。』

さて、どんな問題が来るのやら。と思っていたら、

『……の前に、事前に受けてもらった模擬テスト用紙の結果を見てみましょう。』

……は？

「おい、俺はそんなもの受けた覚えはないぞ？」

『そうですか？あなた、解きましたよね？あの、たくさん問題があった奴。』

……なるほど、あれは俺の実力を試すものだったんだな。

そして、聞けば全問正解。

この言葉に会場が沸きあがったのも言うまでもない。

『それでは、改めまして、第一問！』

さあ、どんな問題が来るのか楽しみだ。

『元素記号、Ｆｅはなにかを答えなさい。』

ハッ。邯鄲……いや間違った、……簡単だぜ！

因(ちな)みに、間違えたほうの『邯鄲』は、鈴虫に似た虫、又は昔の中国

の地名のことだ。
それはさておき、答えは……。

「鉄だ。」
『正解です！』

何だこんな簡単だったのか。拍子抜けだな。

『続いて、第二問！……アメリカのポストの色で主流とされている色は次のうちどれ？』

ん？選択問題か？
……あまり好きじゃないんだよな。だって緊張するじゃん。
まあ、普通に答えるほうも緊張するけどな。
おっと、選択肢を聞かなければ。

『1．赤色　2．黄色　3．深緑色　4．青色』

……う～む、どれだったけ？
3か4だったような……、4だ。うん、4にしよう。

「4番、青色。」

ああ、緊張するな……。
合ってんのかな？心配になってきたぜ……。

『……正解です！』

ふぅ～、危ない危ない。
まったく、嫌な汗かいちまったよ。

『因みに、1番はイギリスや日本、2番はドイツ、フランスなどのヨーロッパ辺り、そして3番は中華人民共和国が主流とされています。』

あ～、長々と説明を……。どうもありがとうございました。
知っているのに話しやがって……。長い話とか嫌いなんだよね、俺。

『ところで、田中さん。』

その考えを断ち切らせるかのように、MCが声を出した。

「……何ですか？」

俺は少々喧嘩腰の口調で返した。
しかし、次の言葉で俺はますます喧嘩腰になる。

『あなたは、人を殺したことがありますか？』

……は？

「あるわけねえだろ、クソが！」
『おかしいな～、プロフィールには書いてあるんだけどな～。』

何言ってやがるこいつ……！

『まあまあ、落ち着いて。』

「これが落ち着いて……！！」

『それでは、第三問！！』

「おい！」

……聞く耳持たず、か。

仕方ない。従うしかないか。……ただ、あとで覚えてろよ。

『……本当に覚えてい無いんですね、田中さん。ま、いいや、心の中で『覚えてろよ』なんて言っちゃってさ……。その台詞、そのままお返ししますよ。』

「！！」

何だこいつ……人の心が読めるのか？

『では、仕切りなおして、第三問！』

……考えても仕方ない。今は問題に集中するんだ。

『鉛筆の硬さで、最も軟らかいものは１０Ｂですが、最も硬いのは次のうちどれ？

１．８Ｈ　２．９Ｈ　３．１０Ｈ　４．１１Ｈ』

「簡単だ。答えは２番。」

『……正解！』

そりゃそうだ。どれだけ知識を詰め込んだと思ってるんだ。

『そうですか。田中さんは高校時代、勤勉家だったんですか？』

……なんで人の心が読めるんだ？

分からない……。それが俺を苛つかせるんだ。

『それでは、第四問、お、これはラッキー問題ですよ？』

ん？何だって？

『まずはこちらをご覧ください。』

そこには、四本のバットが。

『……この四つの中で、あなたのバットはどれでしょう？』

……どれどれ。

一つ目は金属バットだな。普通に野球で使うような。

二つ目は……、これは木製か。周りにデザインがあるから分かりづらいな……。

三つ目は、少しだけ凹んだ金属バット。特にこれといった違いは無い。この凹みは、多分使い込みから出来たものだろう。

そして、四つ目……。

「ああっ！ぐあっ！？」

また、キオ、ク、ガ……。

『あ、このバットいいな～。』

中学生になった俺が言っているな。
そして、あの番組にあったあのバットを欲しがっている。

『じゃ、買ってやるよ。』

『本当!?ありがとう!!』

そして、俺と一緒にいるのは……。

『……さあ、答えてください、田中さん。』
「……!あ、ああ、そうだったな、アハハ。」

さて、記憶が戻ったおかげで、答えられるな。
答えは、

「4番のバット。」
『正解です!』

ふ～、やっと四番目の問題クリアか。

『……ところで、この四番のバット、なんか赤いものが付着してますね。何でしょう、これ。』

……何？

『……あ、もしかして、これで人とか……。』

「言うな！！」

『もしかして、図星ですか？』

「……うるさい。黙れ。」

『分かりましたよ、人殺し。』

これで、俺は完全にキレた。

「おい、俺を馬鹿にすんのも大概にしろよ。」

『馬鹿にしてる？この私がですか？』

「そうに決まってんだろ。これ以上変なことを……。」

『問題行きましょうよ。』

「……。」

『それでは、第五問！！』

その声はスタジオ内に響き渡った。

Q6　問題？（前書き）

いつ更新できるか分からない状態に……。しかも、この小説に至ってはスランプ中なので、何とも言えません（汗）

Q6　問題？

『それでは、第五問！……、１０の１２乗は、兆、ですが、１０の５２乗は何という？』

うわ……、また難しい問題を……。

『１．恒河沙（ごうがしゃ）　２．阿僧祇（あそうぎ）　３．那由他（なゆた）　４．不可思議（ふかしぎ）』

え～、分かるかよ……。

『おや、あなたにも分からない問題が……？』

くそ、憎たらしい笑顔だ……。じゃあ、答えてやるよ！

「１番！」

さて、どうなるか……。

『……正解！』

ふ～、危ない危ない……。

『ちなみに、２番は１０の５６乗、３番は１０の６０乗、４番は１０の６４乗です。』

そうだったのか……。は～、本当に危なかった……。

『それでは、ここからが本番ですよ？』

……何が？

『第六問！……あなたの前の職業は次のうちどれ？』

え？自分、記憶ないんで分からないんですけど……？

『１．ＳＡＴ　２．ＦＢＩ　３．ＣＩＡ　４．ＳＳＴ』

……は？

（え～、ここで、これらが何かを説明すると、一番は武器使用の事件に対して関与する『特殊急襲部隊』、二番はアメリカ国内かその他の有力大使館のある国のみで活動をする、『連邦捜査局』、三番はアメリカ国外で、他国の情報を集める『アメリカ中央情報局』、四番は海上保安庁の特殊部隊で、『特殊警察隊』と呼ばれるものである。）

「おい……、ふざけんのも大概に……！」

『では、答えてください！』

「だから、この中に正解なんてあるかよ！？」

『え？正解があるから、クイズが成立してるんじゃないですか？』

……確かに。正論だ。

しかし、この中に正解なんてあるの……か……？

「……グアッ！？」

あ、頭が裂けそうだ！！

また、記憶が蘇るのか……。

『おい、そっちはどうなっている？』

『順調です。局長。』

『そうか、では、ＣＩＡの誇りにかけて、頼んだぞ。』

『はい。』

「ウアッ！？……。」

俺は、頭を抱えて床に伏した。

『さあ、答えをどうぞ！』

……言わなきゃ駄目だ。言わなきゃ、自分がこれのどれかにいることを認めることとなる。が、言ったら言ったで、自分が認めたといっているようなものだ。まして、ＣＩＡともなれば、秘密の組織。知られてはならないものなのだが……。

『……あと、十秒です。』

畜生！言ってやるよ！

「３番！！」

『正解です！』

とうとう言っちまったよ……。何てことを……。

『それでは、次の問題に行く前に……。』

と、俺を制した。

『あなたは、ＣＩＡでどんな仕事を……。』

はあ！？

「言える訳ねえだろ！！第一、ＣＩＡは秘密の組織だぞ！？」

『でも、ＣＩＡ本部の場所は分かってますよね？』

た、確かにそうだが……。だからって、そうそう口外して良い組織じゃないから言ってるんだよ！！

「……とにかく、俺はそのことに関しては何も言わない。」

『分かりました……。では、次の問題に移させていただきますか……。』

俺への質問拷問は、まだまだ続く。

Q6　問題？（後書き）

う～ん、こんなにＣＩＡとか言っちゃっていいのかな？
ま、いいや。（開き直り）

Ｌａｓｔ　Ｑ　結末（前書き）

今回は、少し、残酷な表現が含まれています。ま、毎回そうかもしれないですけど。
そうそう、タイトルでお察しの通り、今話で最終回です。

Last Q　結末

『それでは、第七問。』

いつもより落ち着いた声でＭＣが言った。そして、出された問題は、

『あなたの少年時代に犯した罪は、いくつ？』

……またかよ。

まあ、いいや。どうせ少ない数字……。

『１．１５０件　２．２００件　３．４８０件　４．５００件』

……おいおい、冗談だろ……？

『さあ、答えてくださいよ！一億円がかかっているんですよ？』

う……。

畜生、分かるわけねえだろ！

『では、そろそろヘルピングツールでも……。』

「待て。俺はそういうの使うの好きじゃねえんだ。」

そう、答えは自力で見つけるんだ。

自力で、な……。

『え～、今件で５００件目ですね。』

……あれ？また過去の記憶が……。

しかも、５００件目って。

『よって、これより、君は死刑を執行する。』

は？俺、死んだのか？死刑になったのか？

『待ってください。その人、こちらに預かれませんか？記憶をなくして……。』

『あ、あなたは！……いいでしょう。好きにしてください。』

まさか、俺を引き取った人って、ＭＣ？

記憶をなくして引き受ける？訳が分からない。まさか、アイツに記憶を……。

「……はっ！こ、ここは……。」

『どうしたんですか？』

あのスタジオだ。

そうだ。問題の途中だった。

しかし、意識も朦朧とし始めて、汗で全身がびっしょりだ。

『では、答えてください。』

「……４番。」

『正解です！』

やった……。

『では、あなたの体力も考えて、今回は特別に次で最終問題とさせていただきます。』

ああ、早く帰らせてくれ……。もう俺は限界だ。

『では、最終問題。……あなたの殺した人数は、全部で何人？』

「はは……。また馬鹿げた問題だな……。」

『……そうかどうかは、あなたの回答にかかっていますけどね。では、選択肢。

1．１００００人
2．２００００人
3．５００００人
4．２０００００人』

……おいおい、何だよ、この数。

俺はそんなに血を浴びたって言うのか？

『さあ、答えろ！！』

ＭＣがなぜかいつもより感情が高ぶってる……。

が、もう意識が朦朧として……。ぐっっ！！頭……！！！

『ヒャハハハハ！これが、俺様の力だ！百人なんてちょろいちょろい。』

『足を釘で打って、止めに、心臓を……。』

『あ～あ、ＣＩＡの俺が見つかっちゃったか……。ほら、褒美だ。爆弾だけどな。』

『おい！ふざけんなよ！俺が死刑だと？殺す！』

『うわっ！裁判官が！』

『貴様を、即刻死刑にしてやる！』

『いいぜ！やれるものならなぁ！』

「ハッ……ハッ……。」

これが。俺の全て。か。

無理だ。答えられない。ここまでしたんだ。俺が間違ってた。死んでもいい。

「……ギブアップ。」

『……ハハハ！僕の、勝ちだ！田中！！』

そして、鈴木は懐から銃を取り出し、

『この番組に負けたら、死ぬんだよ！そんなルールは、最初にお前に言った覚えはないけどな！けどな！僕の家族を殺したお前に生きる資格なんてないんだよ！……じゃあな。』

そして、何かが俺の身体を貫き、数秒苦しみ、目の前が真っ暗になった。

『ゲーム、オーバー。』

鈴木は、静かなスタジオの中でそう言った。

『偽物の放送に、気づかないなんて馬鹿だよなあ……。田中も。』

そう、鈴木の言うとおり、この放送は全て偽物。一人でカセットテープやらで観客の声を偽装したり、観客などを人形で偽装したり、仕掛けを作動させたり、人形にカメラを持たせる等、注視しないと気づかないようになっていたのだ。

『さて、次だ……。』

そう言い、スタジオを『一人で』出て行った。

そうそう、最初に出た他の教師達は、鈴木の側近。人形ではないのだ。

「ここは、どこ……？」

一人の女子学生があの部屋に閉じ込められていた。
そして、

Last Q　結末（後書き）

では、改めまして、この衝動で始めたくだらない小説を読んでいただき、ありがとうございました。はい、自分で言いましたね、くだらないと。最後なんて終わり方が急ですし……。
でも、僕の他の物語は決してそういうことはありませんので、ご安心を。
では、これで失礼します。
読んでいた皆様、ありがとうございました。これからも応援よろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2071h/

クイズの神様！

2010年10月11日23時13分発行